

本願寺史料研究所報

4 8 号

発行所 本願寺史料研究所

〒六〇〇一八二六八

京都市下京区七条大宮上ル

龍谷大学大宮図書館内

電話 〇七五―三四三―三三一―

内線 (五四一八)

発行者 所長 赤松徹眞

発行日 二〇一五年三月三〇日

未完に終わった

上原芳太郎編 『大谷光瑞伝』

和田秀寿

はじめに

龍谷大学龍谷ミュージアムの平成二十六年(二〇一四)秋の特別展『二楽荘と大谷探検隊 ―シルクロード研究の原点と隊員たちの思い―』の準備調査で、本願寺史料研究所において標題の上原芳太郎の資料群を見直す機会を得た。そこで、十数年間探し求めていた、明治期に建てられた建築物の見取図を確認した。今までに無い驚きであった。さらに時間をおき冷静に資料群を熟覧すると、その見取図が描かれた経緯が、今から約八十余

年前の一連の調査で行われた聞き取り調査による資料であることが分かった。さらに、私が特別展の準備で継続していた聞き取り調査と全く同様の作業を、過去に実践していた人物がいたことに感動し、その人物に感服した。その人物が上原芳太郎である。

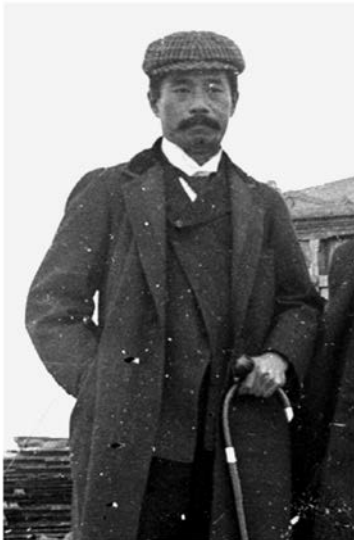
その資料群は、特別展のテーマである、今から一〇〇年前に建てられた大谷家別邸「二楽荘」や「大谷探検隊」に直接関係した人物の直筆による記録であり、両者のテーマ内容を詳細に記していることに重要性がある。そして、これらが本願寺第二十二世鏡如宗主の事績(『大谷光瑞伝』)を編集するための調査資料であることも判明した。ところが、その編集も終盤に差し掛かっていたにもかかわらず、未完に終わってしまった。

以下、上原という人物について、そして『大谷光瑞伝』の構想について、思うところを記しておきたい。

上原芳太郎という人物

上原芳太郎(第1図)の家系は、歴代本願寺との関係が深く、十六世紀中頃の大坂本願寺の時代にまで遡ることができるといふ。上原が本願寺に奉職したのは、十三歳の明治十五年(一八八二)であった。上原は七歳になった幼名峻磨(大谷光瑞、以下光瑞)の相手役を務めた。そして、明治二十年十二月三日、本願寺より奉事務局昵近候所(室内部)に配属される。その後、本願寺の海外開教に伴う視察調査で、朝鮮に赴き(明治二十七年十一月〜十二月)、明治三十年十一月から明治三十三年十月まで帰国を挟みながら中国、南洋諸島、ヨーロッパ諸国を歴訪する。

明治三十五年十月、光瑞からの要請でインド仏蹟調査の応援部隊の一人(第一次大谷探検隊)としてインドへ向かう。インドのシャーバーバーズやガリ付近ではアショー



第1図 上原芳太郎
(明治33年)

カ王碑文の採拓や廃寺の発掘調査を実施し、サールナート(鹿野苑)、ボードガヤー(仏陀伽耶)、伽耶山、前正覚山、などの仏蹟も調査した。同年末から明治三十六年一月十七日までではラージギル(王舎城)に滞在し、周辺の調査を実施した。王舎城に滞在中、上原は隊員たちから「山猿」と呼ばれていたように、連日の山登りの中で、宮垣や礎石を有する遺跡を三十地点余り発見した(上原芳太郎「印度紀行の一斑」『行雲流水』昭和十五年)。この調査の最大の目的は靈鷲山の踏査にあり、一行は説法台を確認している。上原はこのインド調査で、撮影と計測を担当し、「銷夏漫筆」下(『文化時報』昭和八年八月一日一面)では、写真乾板を取り扱う時に落ちる自分の汗に緊張したようで、「若し失敗してあらば再写出来ぬ責任感を起りて、心身の苦悩は尋常のものではなく…」と当時の心境を回想している。上原の海外調査の記録は、『外遊記稿』や『印度紀行稿』として残っている。

明治三十六年三月二十六日付で、僧籍を有しない門徒として奉仕局室内部長に任命され、さらにインド仏蹟調査の実績を評価されたのであろうか、光瑞の推薦で東京地学協会の会員にもなった。そして、五月二十日付で、須磨月見山別邸を拠点とした仏蹟巡拝記編纂係の係員も兼務した。日露戦争下では、戦況及び従軍布教の状況を視察する目的で韓国を訪れている。また、本願寺の法宝物の管理も任されており、宗祖降誕会、明如上人の七回忌法要、親鸞聖人六五〇回大遠忌法要に伴う蒐覧会の出

陳法宝物の選定や配置などにも携わっていた。しかし、本願寺の負債問題が表面化し、内局もその責任をとって更迭されることに伴い、上原も大正元年七月三十一日に室内部長の職を解かれた。その後、上原は京都を離れ武庫郡精道村（現芦屋市）に移住する。

昭和期に入り、上原は本願寺に復職し『明如上人伝』の編纂、執筆に携わった。そして、明治維新以後の本願寺の足跡を近代史の中で明確に捉えた『棟牕餘芳』（昭和二年）や、本願寺の史料から導き出した覚信尼（親鸞聖人の末娘）の事績を綴った『初期之本願寺』（昭和五年）などを著した。そして、『中外日報』や『文化時報』には、数多くの本願寺史関連の記事を投稿した。また、自らも隊員として参加した大谷探検隊の成果報告書である大著『新西域記』（昭和十二年）を刊行する。

さらに、上原は本願寺の歴大な法宝物に関しても、その目録（『本願寺宝庫目録』（昭和十八年））を作成し、昭和二十年の本土空襲に備えて法宝物を疎開させ守り抜いた。「本山の歴史、慣例等に精通する第一人者」、そして「本願寺の生字引」といった上原芳太郎の評価は、昭和戦前期に本願寺の史料を駆使してまとめ上げた数々の成果から与えられたものである。本願寺の長い歴史を紐解く時、上原の著した多くの文献は、基本文献として避けては通れない。

しかし、上原は疎開先から本願寺に戻ってきた法宝物の無事を見ることなく、昭和二十年（一九四五）三月十

三日逝去する。大谷本廟にある上原家の墓碑（第6図）には、「真乘院積夢山」の院号が刻まれている。



第2図 上原芳太郎と妻・品子、孫の直哉と正己（昭和17年頃）

『大谷光瑞伝』の構想

昭和六年（一九三二）三月十一日に明如宗主の夫人心光院枝子が逝去した時、上原は葬儀まで幾日間も夜伽の席で夜を明かした。その時、旧僚と往時を語り、明治末期の光瑞の事績を知る人も少なく、まして明治初期から中期の事績に至っては知る人も限られていることを「晨星寥寥」と、上原は叙述している。文意からくみ取れば「晨星寥寥」とは、知る人が少なく寂しいと言う意味であろうか。この現状を受け止め、上原は「余命幾も無き筆者が、今の内に材料を蒐集して、往時を記録して置くことは、当然為さねばならぬ責務のごとく感ずるに至った。」と『大谷光瑞伝』緒言に綴られ、その構想経緯を述べている³⁾。

その基礎作業は、自宅である武庫郡精道村浜芦屋（現芦屋市）で行われ、光瑞の略年譜を作成し、光瑞と関連した諸氏への聞き取り調査から進められた。諸氏への聞き取りは、書簡による往信を中心に行われ、その返信は昭和六年七月頃から上原の下に届き始めた。本願寺史料研究所保管の資料群（第3図）には渡辺哲信、吉川小一郎、原田了哲、青木文教、和氣善巧、野村栄三郎、口羽義教、麻田駒之助、龍江義信、甲斐和里子、足利瑞義、柱本瑞俊、堀賢雄、瀧川寛了、伊藤洞月などからの返信書簡（昭和七年末まで往信）がみられる。さらに、「原



第3図 上原芳太郎が調査した資料群

稿者」として列記された上原記のメモには上記の諸氏の他に福井瑞華、前田徳水、本多惠隆、阿部一毛、痴山義亮、関次郎、梅上尊融、斯波随性、太田覚眠、朝倉明宣、津村雅量、高木俊一、宇野本堂、松尾善英、中戸堅正、井尻進、大洲鉄也、徳富蘇峰の名前や、上原記の「乙編之一目次」（『大谷光瑞伝』）草稿には「新嘉坡以西印度紀行 五十九頁 櫻井義肇」が記されている。



第4図 『大谷光瑞伝』の緒言原稿（草稿）と有光社の村田鐵三郎の書簡
 （左：昭和11年5月2日付）

『大谷光瑞伝』の構想は、昭和二年（一九二七）に刊行された『明如上人伝』に継ぐ一大事業であったと想像される。昭和十一年五月二日記の上原宛の有光社の村田鐵三郎書簡（第4図）には、同書の刊行には、東京の有光社が引き受ける旨、「絶対権威ある伝記として他の追随を許さざるものたらしむべく」と記されている。

ところで、この書簡後の二ヶ月後の昭和十一年七月八日の上原記の麻田駒之助への書簡草稿には、『大谷光瑞伝』の内容の中で、「西域旅記」の項を分離し単独で編集、刊行する意向が読み取れる。そして、『西域旅記』のタイトルを変更し『新西域記』とする報告も記されている。後に、この単独刊行された『新西域記』は、仏教伝播ルート の 解 明 を 目 指 し て イ ン ド、 中 央 ア ジ ア な ど に 派 遣 さ れ た 学 術 調 査 隊 「 大 谷 探 検 隊 」 の 報 告 書 と し て 高 く 評 価 さ れ て い る。

単独刊行に関しては、出版、協力者である有光社の村田鐵三郎の意向があったことが想像される。『新西域記』上原記の「緒言」に次のような文がある。「支那の新疆は近来世界注目 の 焦 点 と な り た る 観 あ れ ば、我 が 国 力 の 伸 張 す る に 随 っ て、彼 の 地 方 の 地 理 に 歴 史 に 研 究 調 査 を 競 ぶ の 日 は 蓋 し 遠 き に 非 ざ る べ し。」と記されている。

『新西域記』の刊行が、海外進出を考える日本の情勢から、現地の地理や歴史的事項に関わる詳細な内容が高評を博する書籍と予測されたのであろう。さらに、昭和十一年七月八日の麻田駒之助への書簡草稿には『大谷光瑞

『大谷光瑞伝』のタイトルにも言及し、『大谷光瑞伝』や『光瑞上人伝』、また単に『光瑞上人』と冠するかといった上原から麻田への伺いが記されている。

さて、本願寺史料研究所保管の上原関連の資料群(第3図)には、『大谷光瑞伝』緒言の草稿原稿の他に、目次草稿の一部が散見される。



第5図 『大谷光瑞伝』の目次「乙編之一」(草稿)

「乙編之一」(コクヨ六七 十行 廿四詰)の原稿用紙、四枚(第5図)と題する目次草稿には、光瑞の意向(明如宗主時代)で初めて本願寺が内事局員を海外に派遣した明治二十七年(一八九四)十一月の「韓国紀行」(八十九頁、上原)が冒頭に記され、「鵬程紀行」(四十一頁、伊藤洞月)、「英領新義尼亜紀行」(二百一十二頁、上原)、「蘭領印度紀行(見聞雜記)」(四百三十一頁、上原)、「清国随遊紀行」(百二十七頁、上原)、「鏡如嗣法第一次渡欧旅記資料」(新嘉坡日記)(二十八頁、上原)、「新嘉坡以西印度紀行」(五十九頁、櫻井義肇)、「渡辺哲信氏の招」(一頁、無記)、「第一次渡欧の第二期資料」(倫敦通信)(四頁、渡辺哲信)、「渡英日記」(百八十七頁、上原)が章題とし列記されている。

「乙編之七」(コクヨ六七 十行 廿四詰)の原稿用紙二枚と題する草稿には「鏡如宗主第二次遊清資料」として、光瑞が篋子裏方と明治三十九年(一九〇六)九月より明治四十年五月まで清国を巡遊視察する項目が上げられている(上原、渡辺哲信、前田徳水、福井瑞華稿)。

「乙編之八」(コクヨ六七 十行 廿四詰)の原稿用紙二枚には、「雜資料」として、日露戦争に伴う戦況及び従軍布教の状況を調査する目的で上原が韓国を視察(武田篤初執行、木村省吾共)した時の事項(上原)と「関東別院監解時代」(龍江義信)、「南洋開教監解の資料」(原田了哲、津村雅量、口羽義教)が列記されて

いる。

以上の現有資料から未完となった上原編集の『大谷光瑞伝』は、昭和六年（一九三一）春から準備が進められた。しかし、途中『大谷光瑞伝』の内容項目の内、「西域旅記」の項目を単独で刊行する案が出て、最終的に『新西域記』として昭和十二年三月に刊行された。そして、昭和十二年三月の段階で『大谷光瑞伝』は、ほぼ摺筆されており、その原稿は二百五十万字を数えた。四百字詰め原稿に換算して六二五〇枚という膨大な原稿であった。その中には、『新西域記』（従前題「西域旅記」）の原稿枚数も含まれていた。『大谷光瑞伝』の内容は、明治期のみに限定され、時系列で項目が挙げられていた。さらに、甲編を日本での事績、乙編を海外での事績に区分されていたと推測される。

昭和十三年（一九三八）四月二日の上原記の村田宛の書簡草稿には、本願寺の法宝物の撮影準備の内容と共に、『大谷光瑞伝』の挿図写真の編集着手依頼も記されている。おそらく、この依頼は、上原が昭和六年以降収集した大谷光瑞関連の写真資料の撮影を示していると思われる。資料群には、上原記の「上人伝材料写真目録」がある。写真の総点数は百三十五枚に及び、写真の所蔵者、印刷所への送付日、所蔵者への返却日などの写真の取り扱いに伴う履歴が記されている。それによると、昭和十三年十月三十一日には借用先への写真の返却を終え、有光社保管の写真についても、上原は村田宛に確認を行っ

ている。

そして、その確認依頼の書簡控（昭和十三年十月三十一日記）には、『大谷光瑞伝』への挿図に『新西域記』の写真を活用したい旨が記され、流用写真の原板を大切に保管してほしい事が明記されている。これによって、『大谷光瑞伝』の原稿と挿図写真の複写は、ほとんど完了し、出版段階を迎えていたと想像される。しかし、以後、どのような経緯で刊行が難航し未完に終わってしまったのか判然としない。ただ、上原は、昭和十四年以降も雑誌『大乘』への投稿や自らの古稀記念として『行雲流水』を昭和十五年七月に『大谷光瑞伝』刊行予定であった有光社から出版している。上原の身体的な理由で刊行に至らなかった事は考えにくく、出版元の有光社との関係でも問題はなさそうである。他方からの指示によることや単に経費的な面とも想像されるが詳細は不明である。

おわりに

『大谷光瑞伝』緒言の草稿原稿に上原芳太郎は、葛飾北斎の『富嶽三十六景』の浮世絵で、大樽の中で板を削る職人の姿が描かれ、樽の中から田園風景の彼方に富士の姿を見る「尾州不二見原」を引用し、自分自身の仰ぎ見る光瑞の姿を、その絵画の中の富士の姿に例えた。上原にとって光瑞の存在は大きなものであり、明治十五年

(一八八二) 九月から明治四十五年(一九一三) 七月までの間、大谷家の側近から、本願寺の海外伝道、開教の海外視察、さらに仏蹟探検の調査、法宝物の展示に従事してきた。さらに昭和期には、上原は本願寺の膨大な資料を整理し、調査、目録作成、研究、そして法宝物や障壁画の保存活動の中で、歴史的資料を扱ってきた。機縁で出会ったすべての事象を後世に伝え残すべきものとして上原は認識し、自己の責務であると感じていた。

昭和十八年(一九四三)、日本も戦時色が濃くなり本土空襲が言われるようになった。政府は「国宝・重要美術品ノ防空施設整備要綱」を決め、本願寺は法宝物を空襲から保護する必要から、京都府と法宝物の疎開の具体的な案を検討した。その本願寺側の中心人物が、室内部長柱本瑞俊と上原であった。⁵そして、法宝物や障壁画の一部は、昭和十九年九月中旬から「醍醐」、「御室」、「日



第6図 上原家の墓碑(大谷本廟)

野」、「吉野」へ分散して疎開させた。その時、上原ほどの資料をどこに疎開させたのかを、『本願寺宝庫目録』(一九四五)に記していた。昭和二十年一月三十一日付の上原が自宅の浜芦屋から徳富蘇峰宛に送った書簡(徳富蘇峰記念館所蔵)には、「醍醐」、「御室」、「日野」への疎開を昭和十九年十二月末に完了し、「肩の荷を卸し」と記されている。上原が守り抜いた法宝物は、昭和二十年九月から順次本願寺に戻ってきた。しかし、その無事を見ることなく昭和二十年三月十三日に上原は逝去する。上原が本願寺に尽くした最後の奉公であった。

現有する本願寺の法宝物等は、歴史の流れの中で、上原が関与し守り継がれてきた。本願寺の資料調査や全国の寺院の悉皆調査で上原が関わったと考えられる痕跡をよく眼にする。法宝物の共箱に付されたラベルや懐紙に記された筆跡、古写真に注記された筆跡、これらの資料は、上原が八十年以上前に実見し調査した資料である。裏を返せば、私は、これらの資料を再度実見し調査しているということである。今後、上原が調査研究し次世代に伝えてきた膨大な資料群を、現在の研究レベルで精査し次世代に伝え残していく必要がある。私はその痕跡を見るたびに、緊張感の中で気が引き締まる思いがする。

上原は『大谷光瑞伝』を公刊し、後世に記録を残そうとした。内容は違えども二〇一四年秋、展示という媒体で明治期に生きた人たちの証を伝えようと、試みたのが当該特別展であった。上原が残した多くの資料を、すべ



第 7 図 特別展『二楽荘と大谷探検隊』（龍谷ミュージアム）展示会場

て援用して展示することはできなかったが、今後も、上原が抱いていた資料への執着と責務を思いつつ研鑽を積んでいきたいと思っている。

〈注〉

(1) 平成二十五年(二〇一三)九月二十七日に資料を見つけた。

そして、この見取図は、大谷光瑞が明治四十二年、神戸の六甲山中腹に建てた別荘「二楽荘」本館の図である。昭和七年(推定)一月二十四日に、上原芳太郎が、吉川小一郎に聞き取りした時、吉川が作図、添付して返送した資料である。二楽荘本館一階・二階・地下の見取図が約一六〇分の一で描かれている。二楽荘本館の各部屋の配置やその大きさについては、古写真から推定して復元したが、見取図が確認されたことにより、本館内部の間取りが確定でき、貴重な資料と言える。そして、この見取図は、今回の特別展の主要展示資料となった。

(2) 和田秀寿「上原芳太郎と本派本願寺」(『龍谷史壇』一三一号、二〇一〇年)、和田秀寿「上原芳太郎と大谷光瑞」(柴田幹夫編『大谷光瑞とアジア』、勉誠出版、二〇一〇年)、龍谷大学龍谷ミュージアム特別展図録『二楽荘と大谷探検隊』(二〇一四年)一三六頁、一三七頁を参照されたい。また、大原誠は、上原を本願寺史の研究者と理解し、本願寺の歴大な史料を原点として、本願寺史を構築し論じている点を高く評価している(『本願寺史』以前)『宗報』四八二号、浄土真宗本願寺派、二〇〇七年)。

(3) 「蒙疆探検紀行抄(一)」「大乘」第十八卷第六号、昭和十四年刊、「緒言」「新西域記」(昭和十二年三月記)にも類似する内容が上原によって記されている。

(4) 村田鐵三郎は、昭和十二年四月に刊行された『新西域記』に尽力した人物でもある。編著に『難思』(昭和十年)、『観音図集』(昭和十六年)、『宗教年鑑』(昭和十四年版)がある。

(5) 本願寺法宝物の疎開については、当時京都府学務部社寺課の赤松俊秀の指導の下で行われた。その疎開作業に従事した一人に京都府寺院重宝調査事務嘱託であった平松令三（龍谷大学文学部教授、二〇一三年五月還帰）がいた。平松は赤松の下で、国宝防護に関連した調査に携わっていた。疎開先の「醍醐」（醍醐寺三宝院コンクリート造蔵）には国宝に指定されていた法宝物等が運び込まれた。その一つである「一文字茶碗」は平松が膝の上に安置し、京都府知事の車（ガソリン車）で運んだと言う。平松の疎開の様子を綴った回顧談（『季刊せいてん』No. 四八、本願寺出版社、一九九九年）には、疎開する法宝物は点検し預り証が作成され、主に木炭車で運び込まれていたが、振動で破損する恐れのある「一文字茶碗」は「トラックにのせてもらってはこまる。……ちゃんとした乗用車に乗せて抱いていてほしい」と上原が進言したと言う。戦中の危機管理の中での上原の冷静さと資料保存への強い思いが読み取れる一文である。

(6) 龍江義信の写真資料（個人蔵）には、付箋に上原が記した写真解説が明記されている。和田秀寿「大谷探検隊の一側面―南洋諸島を調査した龍江義信の事績を中心として―」（『仏教学研究』七〇号、二〇一四年）を参照されたい。

〈挿図注〉

- 第1図 龍谷大学蔵 第2図 個人蔵
 第3・4・5図 本願寺史料研究所保管
 第6図 大谷本廟にて筆者撮影 第7図 龍谷ミュージアム提供
 （わだ・ひでとし 龍谷ミュージアム学芸員）

《頁の余白に》「近世の本願寺、その日その日」（編集子）
 頁の余白を埋めるべく、編集子の引き出しを探ってみました。編集子は数年来、「増補改訂・本願寺史」の年表への追加項目を採取する目的と自分の勉強を兼ね、史料研究所保管の近世本願寺の日次記を展開する作業を続けています。面白い記事に出会えない退屈さや眠さ、悪筆のくずし字が読めない少しの悔しさ、湿気で板状になった丁の展開の際のホコリ、しかし、断片的ながら時にハッとする記事との遭遇、しんどくもあり楽しくもある作業です。展開した日次記や冊子類が三千冊を越え、四千冊目が視野に入るにいたって、そこそこの記事が溜まりました。従来の近世本願寺の歴史像を再考させるような内容では当然、全くありませんが、それなりに編集子の興味アンテナに引掛かった記事を紹介してみたいと思います。

【寂如宗主と水薬師】 水薬師とは、京都市下京区西七条石井町にある真言宗の水薬師寺です。本願寺より西南西に直線距離で約八百メートルほどでしょうか。近世後期には京都十二薬師の一つと位置づけられ、平清盛が井戸の水を浴びて熱病が治まったという伝承があるそうです。

この水薬師に寂如宗主が、しばしば御成しています。編集子が日次記の展開作業で、最初に気がついたのは、「（仮称）御堂日次之記」正徳二年（一七一二）四月二十一日条です。記事は簡略なものです。

一 水薬師江御成

御輿脇 求馬・源助

御先 四人

辰刻半御成、申刻前還御

寂如宗主は輿に乗って、水薬師に御成しています。日次記では輿に乗らない御成については、歩行と記されている印象ですので、御成の基本は輿に乗ってだったと推測しています。寛文期から残る「(仮称)御堂日次之記」で、この記事が初見である保証はありません。あくまで編集子が最初に気付いた記事にすぎません。寂如宗主は数えて六十二才でした。そして編集子が確認できた最後の記事は、享保八年(一七二三)九月三日です。寂如宗主が七十三才で亡くなる二年前です。この時は、御供衆八人が随行していました。

さて、では寂如宗主は、正徳二年四月二十一日から享保八年九月三日の十一年ほどの間に何回ほど、水薬師に御成したのでしょうか。編集子が日次記で確認できた回数(七十回です(編集子の見落としの可能性もあり))。日次記を展開していると寂如宗主だけでなく、寂如宗主以降の宗主もいろいろな場所に御成している記事に遭遇できます(いずれ紹介したいと思いますが、ほぼ定期的に行事に際し宗主が御成する大谷本廟や山科御坊などと、しばしば宿泊が伴った避暑目的の山科露山への御成を除けば、寂如宗主の水薬師への御成回数は、圧倒的な

回数です。さらに水薬師への御成は日次記で確認できる範囲では、寂如宗主にだけしか確認できません。

「起居筆記」安永八年(一七七九)二月九日に法如宗主が、歩行にて東寺に御成のちに、芝地にて花を觀賞し、八条通梅小路梅林寺・水薬師に立ち寄り、寒水川茶店にて小休して、七条通川勝寺村からは乗輿して還御した記事があります。しかし、水薬師への御成が目的ではなかったことは明らかで、寂如宗主の場合とは性格が違うだろうと考えています。

寂如宗主の水薬師への御成は、月日が決まっていますでしたが、一定の傾向は見て取ることができます。秋冬の期間はめったになく、梅雨から初夏にかけての時期に集中しています。そして、一番多い時には一月に五度という年もあります。享保四年(一七一九)の六月が、二日・十一日・十三日・二十三日・二十九日の五度です。さらに一月に三度の年が三回あります。享保元年(一七一六)の六月が十一日・二十三日・二十九日、同三年六月が十三日・十六日・十九日、同七年五月には九日・十一日・二十一日の三度です。通常の一年の御成回数は四回から六回ですが、上記の四か年は享保四年が十一回、享保元年と七年がそれぞれ八回、享保三年が七回です。このような御成の状況から判断すると、寺家としての本願寺と水薬師寺とのなんらかの儀礼的な関係に基づいて、寂如宗主が御成したとは考えられません。あくまで寂如宗主の個人的な事情による御成であったと考えられます。

寂如宗主の御成に、娯楽的な要素がみられるようになるのが、享保元年三月十九日の御成です。この時以降は、紹茶・養竹・友湖・友也・友悦らの内の一人が必ずずではありませんが、御茶道として帯同するようになります。また同年八月十五日からは御伽衆も帯同したり、茶道仲間でしょうか、沢右衛門佐・藤井兵部大丞・綾小路三位らが「誘引」されたりしています。「誘引」については、藤井兵部大丞が寂如宗主の水薬師への御成の噂を聞きつけて、藤井の方から御成先に綾小路三位を誘って伺候したい旨の希望を出している事例もあります。

御茶道については、これら以前にも御茶道とは肩書きされませんが、正徳四年七月九日・同五年五月二十六日の御成には、紹茶が供奉衆に加わっていますので、水薬師でお茶が点てられていた可能性ががあります。同年三月晦日には客が同道し、「夕御料理」が水薬師に運ばれたりしていますので、娯楽的要素がまったくなかったわけではないようです。

このように御茶道と御伽衆の帯同や料理などという点からすると、暑氣払いにお茶の楽しみを付加した御成ではなかったかと想像されるにしても、正徳二年四月二十一日から享保元年閏二月十七日までの十七回の御成は御茶道を帯同しない、小規模の御成がほとんどで、また前記したように享保元年三月十九日以降にも、御茶道を帯同しないこぢんまりとした御成もおこなわれています。

娯楽がともなわれない御成であるなら、寂如宗主の何か

特別な意味が込められていた御成ではなかったかと興味の想像が膨らみます。山科露山よりも距離的にはるかに近い楽しみのある場であったとしても、寂如宗主にとってなぜ水薬師がそのような場に選ばれたのか、なりえたのか、単純な疑問ですが、編集子にとって答えるのは難しい疑問です。

【編集後記】

なんとか年度内に間に合わせる努力の結果が本号です。龍谷ミュージアムの特展の後整理にご多忙中にも関わらず執筆の労を執っていた和田秀寿さんに感謝です。龍谷ミュージアムの特展の副題は、「シルクロード研究の原点と隊員たちの思い」ですが、展示図録を見せていただくと、通常の展示図録の域をはるか上空に超えて、「隊員たちの思い」に対する担当学芸員としての和田さんご自身の「思い」が、それこそ思い切り込められている展示図録だとの感想が浮かんできました。

ところで編集子は、数年前から「ショック・ドクトリン」という言葉を、何度か耳にし、目にもしてきましたが、あまり実感を持っていませんでした。しかし、そんな学術的なカタカナ語を使わなくとも、いささか品が落ちるかわりませんが、身体感覚的により腑に落ちる、「火事場泥棒」「焼け太り」という方がぴったりといえそうな事態が進行しているように感じられてなりません。どこにでも貼り付く膏薬レベルの理屈がまかり通る状況に、背筋の寒さ、唇の寒さを感じる日々です。

(歩弥紡)